

内科医が遭遇する 皮膚疾患フロンタイン

「皮疹」は現場で起きている!

「皮膚疾患は難しい」と研修医は嘆く。僕は「見ればわかるさ。こんなにスピーディーで安価な科はないよ」と嘯く。^{うそぶ}

内科医や研修医の皆さん、本誌を手にとっていただき、深謝いたします。本誌をたまたま購読されている方もいるかもしれませんが、本特集を読もうとしていただいているなかには「皮膚疾患が大好き!」という方はごく少数で、「皮膚科はよくわからない。外来・病棟で患者や看護師に相談されるものの、よくわからん」という消極的な理由も多いと推察いたします。

皮膚疾患は種類も多く、ざっと 2,000~3,000 種類あると言われています^{1,2)}。しかしわれわれが外来で主に対応しているものは、せいぜい 100 種類。過去には外来に来る上位 20 疾患で、85% 程度の皮膚疾患は占められていると報告されています^{1,2)}。

当院（水戸協同病院）では、多くの若い研修医が勤務しています。とりわけ「総合診療科」として臓器の垣根を作らず、総合的に複数人のチームで患者さんに対応するのがウリであり、全国から当院での研修を希望して集まっています（2023 年 8 月現在 45 名）。彼らは内科疾患はもとより、担当患者さんに起こりうる難解な皮膚疾患にも興味を示し、皮膚科をローテーション研修してくれたり、足しげくわれわれのいる皮膚科外来に顔を出してくれたりして、皮膚科のプライマリケアについて日々研鑽を積んでいます。

当院のような常勤皮膚科医師がいる病院では、ともすれば「皮膚の疾患」というだけでつつい皮膚科外来に“丸投げ”してしまいがちかもしれませんが、彼らはそうではありません。彼らの目標は「次は自分でやれるように!」「次はどこまでやって、いつ紹介するかのタイミングを見逃さない!」であり、頭が下がります。今回の特集に当たっても、当院の研修医に「いつも困る皮膚対応」や「学びたい皮膚疾患」を募集

したところ、100 前後の回答をもって、協力してもらいました。

どのような疾患で入院していてもプライマリな皮膚疾患は常在しており、皮膚は「患者にも見える」わけで、気軽に相談される部類の分野でもあります。しかしすぐに皮膚科専門医に相談できる状況・施設ばかりではありません。そこでさまざまな症状を相談されるかかりつけ医の方や、入院病床というまさに診療のフロントラインに立っている勤務医・研修医の皆さんに向けて、①どう考える？ ②最初に行うべきことは？ ③皮膚科に相談すべきタイミング という3点に焦点を当てて、本特集を構成しています。

次に、先述したアンケートの上位ランクの皮膚疾患について、各分野のエキスパートに診療のポイントをわかりやすく解説いただき、読者の方々に理解してもらえるように組み立てました。

こういうことを書くと皮膚科の偉い先生には怒られるかもしれませんが、「湿疹であっても水虫であっても、皮膚科にすべて任せていたらつまらないよ。僕が教えるからさ、他科であっても、やれるようになろうよ」と話しています。

本特集が、さまざまな分野で伸びていく研修医や地域で活躍されている内科医の方々のお役に立てれば、本当に嬉しいと思います。

●文献

- 1) Burns DA, Cox NH : Introduction and Historical Bibliography. Burns T, et al (ed) : Rook's Textbook of Dermatology 8th ed, pp 1.1-1.10, Wiley-Blackwell, Hoboken, 2010
- 2) Naldi L : The Field and Its Boundaries. Williams HC, et al(ed) : Evidence-Based Dermatology 2nd ed, pp 1-7, BMJ, London, 2008



田口 詩路麻

水戸協同病院皮膚科